

「この世に愛が無かったら、私はどれ位楽なのだろうか？」

私が、指導者としての道を進まなかったら、私は…本当に幸せになれたのだろうか？

エウーゴとの非公式会談の後にシヤアだけを呼び止めたのは、彼を利用しようという戦略的な意味では無く、あくまでも個人的な感情での事だった。

もちろんエウーゴの幹部達はその様な事を知る由もなく、これ幸いにとばかりにシヤアを『親善大使』という名目の下に、更なる共同歩調の為の会談と称して数日間の滞在を申し入れたのだ。

彼等の目的は判っている。彼は元々ジオンの人間…ジオン・ダイクンの忘れ形見であるシヤアを前面に出す事によって、我々ジオンの警戒感を解いて交渉を有利に運び、あわよくばその滞在期間中に艦の装備も含めた軍事機密の一つでも知る事が出来れば…とでも考えているのであろう。

エウーゴの幹部連中は、顔は一見穏やかで友好的な感じではあるが、肝心の目が鋭い野獣のようにギラ付いている…こいつらも所詮地球連邦の幹部連中と同じだ。地球、そしてそこに住む人間の事など何一つ考えておらず、常に自分がどうすれば優雅に面白おかしく暮らしていけるかという事しか考えてない連中なのだ。

そこで、私はその席上で「シヤア一人がここに残り、私と単独での交渉に望むならば、我々は更なる譲歩と数日間の交渉期間の延長を認めるのだが・・・」と言ってみた。もちろん、交渉決裂は覚悟の上での事だ。すると、所詮は外様、使い捨ての現場リーダーとしてしか評価されていない立場の為か、幹部連中は意外にあっさりと承諾したのだった。

たぶん、彼はこれからの数日間の会談で何一つエウーゴに対して有益な交渉結果を導き出せなかった場合：間違いない『ジオンのスパイ』という名目の下に失脚させられる事であろうが、何はともあれ、これからの数日間、私はシャアと誰に氣遣うでも無く合う事が出来るのだ。

それだけでも：私の心はときめいてしまう。まるであの頃の事を思い出すかのように…。

エウーゴの使節団が帰り、それをデツキでじつと見送るシャア。エウーゴにいても赤を基調とした服を纏い、自身の心を見透かされない為のサングラスを欠かさない男…。私は彼のやや後ろに立ち、彼が何かリアクションを起こす事を待った。

シャアの後ろ姿：言葉は交わさなくても、私には彼が今置かれた状況が手に取るように判る。彼は決して今の自分の置かれてる状況に満足してはいない筈だ。むしろ、シャアという名前は伏せたかったのだと私は思うのだが：と、私が思った所で、シャアがサングラスを外しながら私の方へ歩いてきた。

アクシズに居た頃よりも、やややつれた表情になったシャア：自分の本当の心を押し潰して、他人の欲の為に戦うシャア：身勝手な指導者としての像を押し付けられるシャア…。シャアが、私に対して少し懐疑的な口調で言い放った。

「私だけを残して：一体どうするつもりだ？ 『裏切り者』として処刑するつもりなのか？」

私はサッと辺りを見回した。警備の為の兵が数名立っている。その為、『アクシズの指導者』としての口調で答えた。

「処刑？ くくくつ、貴様を処刑したとして、一体我々にどんなメリットがあるというのだ？ こちら側からお前を交渉役に指名しておいたのに処刑したとあれば、エウーゴに体の良い攻撃材料を提供する

ただだからな。もつとも、エウーゴはお前を利用するだけ利用する腹づもりのようだがな。エウーゴも緒戦は連邦の端くれ。『英雄』を利用する事はしてもそれ以上の事は望んではおらんぞ？ お前はそれで良いと思ってるのか？ 赤い彗星と言われた男が…ホント情けないものだな」

私は精一杯の憎まれ口を言ってみた。もちろん、彼の本音を引き出したいが為の事であり、最悪彼が私を平手打ちしてきても構わないとさえ思った。しかし…。

「笑ってくれて構わんよ…。今の私は『生き恥』そのものだからな…」

私は多少拍子抜けしたと共に、彼がこんなにまでも自分を殺してまで生きなければならないという事に、とても深い哀しみを覚えた。

「ふんっ。それもこれもお前自身が選んだ道だ。ともかく、私の部屋で人払いをしてゆつくりと話し合おうではないか。なあに、時間はたつぷりとあるんだ。たつぷりとな…ふふふっ…」

そう言いながら私は、高鳴る胸の鼓動を必死に隠しながら、シャアを自室へと導くのだった。

部屋に着いた私達は、まずソファに座り、他愛もない話から入っていった。

「大したモノがある部屋ではないが、まあ、ゆつくりしてくれ。とりあえず、お互い緊張を解して打ち解け合ねば会談どころでは無いからな…。所で、酒のリクエストはあるか？」

「年代物のウイスキーがあれば…」

「昔のように…ロックでいいのか？」

「私はそれしか飲み方を知らんもんでね」

「ふふっ、そうだったな。で、あの頃は私が口移しで貴様に飲ませていたが…今もそうするのか？ 構

わんぞ、私は」

「……」

「ふふっ、冗談だよ」

私はグラスと氷を用意し、宇宙世紀以前に製造されたウイスキーを、棚の奥から取り出した。シヤアはそれを手に取ると、珍しそうに眺めるのだった。

「これは…よくこんなモノがアクシズに残っていたもんだな…」

「私の父、マハラジャの遺品の中にあった。これは、いずれ重大な事を決断した時にでも飲もうかと思つてとつてあったものだ」

「成る程。で、今がその時だと？ 一体何が…？」

「とりあえずその話は飲んでからだ」

グラスに氷を入れ、ウイスキーを注ぎ、その一つをシヤアに手渡した。

「では、エウーゴとジオン、双方の前途を祝して…」

お互いのグラスが軽く触れ、カチンと堅い音が鳴り響いた。

その後、私達はしばらくの間雑談に終始した会話をしていた。やがてお互いの緊張が解れてきた頃を見計らつて、私はこう言ってみた。

「シヤア、この部屋には私達以外には誰もいないし、声は外に漏れないような構造になっている。勿論監視カメラなどは設置されてない…そこでだ…」

「そこで？ 何だ？」

「私も体面的な事があるのでこの様な話し方をしているのだが、そろそろ『仮面』を脱ごうかと思うのだが…構わんか？」

私はそう言うと、扉を内側からロックした。

「私は構わんが…私に弱みを見せてもいいのか？」

「弱みだと？ ふふふ…散々私を弄んで捨てたくせに…」

「私は捨てたとは一言も言っていないぞ」

「なら、私はまだ貴方の…貴方の…『慰みモノ』としての『奴隷』なのか？ シャア？」

私はそう言うと酔った勢いも手伝ってか、ゆっくりと服を脱いだ。一瞬我ながら大胆だとは思ったが、元々私達はそういう関係まで発展した仲だったので、直後にはそのような気持ちなど、どこかに吹き飛んでいた。

シャアの目の前に下着姿で佇む自分がいる。彼がアクシズから出ていった時から、どれ程この瞬間が来るのを待ちわびた事だろう。胸の鼓動が再び高鳴ってくるのが判る。シャアはソファに座りながら、グラスを片手にじっと私を見ていた。

「ハマーン…」

「何？ シャア…」

「いい女になったな…」

「ふふつ、シャアにそう言われるの…私…ずっと待ってたよ」

嬉しさと胸が一杯になった。やはり私はどんな時でもシャアの事が好きなのだ。地球圏の将来や、ジ

オンの民の事も大事ではあるが、それは全てシヤアの為と思ってやってきた事なのだ。そしてシヤアがアクシズを去った後でも私がここまでやってこれたのは、彼が再び戻ってきた時の受け皿を作ってきたからに他ならないからだ。但し、その事に関しては、指揮の面からも規律の面からも決して誰にも言える事では無いのだが…。

「下着も脱いでくれないか？」

しばらく女性との関係を絶っていたとみえて、シヤアは久しぶりに見る私の体に興味があるようだ。もつとも、最後に関係を持つてから5年以上経ってる訳であるから、成長した私の体が新鮮に見えたとしても、何も不思議な事ではないだろう。

私は、言われるままにゆつくりと下着を脱ぎ、一糸纏わぬ姿になり、シヤアの面前に歩み寄った。シヤアが酔った表情で私の体を多少蔑みながらではあるが、隅から隅までなめ回すように眺めている。

自分から進んで裸になるなんて、我ながらとても大胆な事をするなとも思ったのであるが、以前の私達関係の事を思えば、大した事では無いのもまた事実であった。

「シヤア。覚えてる？ 貴方が『お前は俺のモノ』として私に施した証を…」

私はそう言つて、両乳首に付属しているリング状のピアスを自身の小指でそつと弾いてみた。

「うんっ…」

興奮と刺激の為に、思わず声が出てしまった。その時、シヤアは多少嬉しそうな表情をしながら言つた。

「覚えてるとも…。確か下…ラビアの方にも開けた筈だが…」

「見て…みる？」

私はそう言うと、ソファに座っているシャアの面前に股間を近付け、足を多少開き気味にして両手でラビアを広げて見せた。左右のラビアには、それぞれ耳に付けるようなアクセサリーを常時付けているのだ。シャアに私の大事な部分を見られている、それもイヤらしいピアスが装着されている部分を…そう思うだけで、私の鼓動は更に高鳴り、体が熱く火照っているのが判る。

「確か下のピアスもリングの筈だったが…」

シャアが、私のラビアを触りながら言い放った。股間への刺激が、私の理性を徐々にではあるが麻痺させていく。

「リングだと…歩く度に擦れて…その…んっ…あんっ!!」

興奮して大きくなってきてたクリトリスを、優しくではあるが不意に触られてしまったので思わず声を出してしまった。そして、シャアは私の大切な部分に中指と薬指の二本を滑り込ませ、溢れ出てきた蜜をすくい取った。

「ヌメリテカってイヤらしい蜜だな…」

そう言いながら、シャアは彼の指に付着した私の液体をそつと舐めた。

「体は大人に成長しても、味は変わらないものだな…ふっ」

冷めた目で私を見下したように言い放つシヤア。そう、私はシヤアのそんな所が好きだったのだ。クールで、私のプライドをズタズタに引き裂き、の快楽を追求する雌犬としての私を弄ぶ存在…。大勢の人が私を慕って尊敬する中で、貴方だけが私の性癖を見抜き、雌奴隷としてのもう一人の私を解放してくれた…。シヤア意外にも絶対の忠誠を誓った数人の者が私の性癖の事を知ってはいるのだが、本当の意味で心を許せる存在なのは…彼だけなのだ。

ふと、シヤアの股間の方へ目をやった。すると、心なしか膨らんできているのが見えた。私は妙に嬉しくなり、こう言い放った。

「この部屋での事は絶対に言いませんから…今日だけは昔のように私を…」

「私を…何だ？ はっきり言ってくれなければ判らないな…そうだな、犬が飼い主をお願いするような感じで言くれ」

もうこの時点からプレーが始まっているのだ。奴隷としてのイヤらしいお願いを、あくまでも私の口からハッキリと言わせたいらしい。恥ずかしい。とつても恥ずかしい事だ。

普段は人に命令する立場であるはずの私が、命令されたからとは言え、犬のように這い蹲ってイヤらしい行為をお願いしなければならないのだ。人に見られれば、一瞬にして私の立場が崩壊してしまう位

恥ずかしい姿…でも、それを心の奥底で望んでいるもう一人の私がいる。言い放って楽になりたい。でも恥ずかしい。でも…。

そんな心の中での葛藤がしばらく続いたが、体の中から込み上げてくる疼きには耐えられず、勢いに任せてこう言い放ってしまった。

「私を…昔のように貴方の思うがままに弄んで下さい。私は貴方の前では一匹の嫌らしい快樂を求める雌犬なんです。お願いします…私の…御主人様…」

四つん這いになりながらシャアに嫌らしい行為をお願いする私…。私の心の中では取り返しの付かない事を言ってしまったとう後悔の気持ちと、心に秘めていた事を本能の赴くままに言い放ったという開放感が複雑に入り交じっていた。そして、ふと自分の股間に目をやると、ラビアを伝って愛液が床に垂れかかっていた。

端から見たらこんな屈辱的なことを強いられてるというのに、私はこんなにも感じている…。やはり私はシャアの前ではマゾなんだ…そう思った時、私の心の中で引っかかっていた何かが、パチンという音と共に弾けた。

そうしていると、シャアは一端立ち上がり、四つん這いになってる私の前に屈むと、グラスを持って

いない左手で私の顎をクイツと持ち上げた。一瞬シヤアと目線が合ったが、恥ずかしくてとても見てられない。思わず目線を逸らしてしまった。すると…。

「誰が目を逸らせと言った？ 私の方を見る」

「はっ、はいっ！」

私は慌ててシヤアと目線を合わせた。胸が高鳴り、ドクドクと脈打っているのがハッキリと判る。床に付いてる手は汗ばみ、顔は熱く火照っている。シヤアの方から見たら、多分私の顔は真っ赤になっているのだろうな…などと思っていると、彼が優しく言った。

「本当は会談なんてどうでもよくて、私にこんな事をして欲しいが為に…引き留めたのか？」

「そっ…それは…」

「正直に答えるんだな」

一瞬躊躇した後、私は本当の事を白状した。

「そうです。その通りです。私はその昔、御主人様に調教して頂いてた身ですから、御主人様がアクションから去られてからは本当に心の中に穴があいたような日々を過ごしておりました。あの頃は、表向きの顔では、御主人様を罵り、罵倒するような事もしましたが、それは裏の顔…私にとってはとても辛いことでした。御主人様がいなくなってから、自分で自分を慰めたり、絶対服従を誓う者

を使って御主人様がやられたような事を再現してみましたが：決して私の心は満たされることはありませんでした。そして、表の顔の私がアクシズを再建し、地球圏に再び舞い戻る準備を整えた時、裏の顔の私は『これでまた御主人様に会う事が出来る。どんな手段を使ってもお会いして、また私を弄んで頂きたい』と考えておりました」

練習もしていないのに、今まで心の中に溜めていた言葉が、次から次へと飛び出してきた。

「成る程、それで今回の会談を利用した訳だな」

「はい。その通り：です」

「ハマーン、お前は何て恥知らずなヤツなんだ。アクシズの指導者ともあろう者が、実はただの淫乱な雌犬で、しかもエウーゴの一員である私に淫らなことを強要してるだなんて：お前の部下がこの事を知ったら一体どう思うだろうな：。何ならこの事を地球圏のマスコミに流してやろうか？」

「そつ、それだけはお許し下さい。そんな事したら：私の築き上げてきた立場が：破滅ですっ！！」

「何故？ 本当の事じゃないか。お前は全てを失う事になるだろうが、言えばきつと楽になるぞ。もうあえて苦しい事を考えずに、快楽に身を任せて生きていけるんだぞ。そうだ、そのイヤらしい姿も世界中の人間共に見せてあげるとしよう」

シヤアはそう言うと、近くにある映像通信の端末回線を開こうとした。私はシヤアに縋り付き、必死に懇願した。

「お願い！ それだけは…それだけはやめて！！」

「それを言うなら『お許し下さい』だろう？ ハマーン？」

そうだ、私はあくまでもシャアの奴隷であり、どうするかという決定権は全て彼が握っているのだ。今の私は、ただ彼に懇願するしかないという立場なのだ。

「はい、奴隷の分際で失礼な口をきいてしまつて申し訳ありませんでした。しかし、この姿を世界中に晒す事だけは、どうか…どうかお許し下さいませ。その代わり、他の事でしたらどんな責めでもお受け致しますので…」

「どんな責めでも…だと？ 例えば私が『シロッコと寝ろ』と命令すれば、お前はヤツと寝るのか？」

「はい。御主人様の命令ならば…」

「ジャミトフでもか？」

「はい。私の心は御主人様のモノですから、御主人様が命令されれば…ただ、私のイヤらしい姿を世界中に晒す事だけはお許し下さいませ。私自身が破滅するだけならまだしも、『ザビ家の復興』を掲げて日夜寝る間も惜しんで私に付いてきてくれたアクシズの民に…申し訳が立ちません」

「お前は表では冷酷な淑女を演じてはいるが、その実は蔑まれ、屈辱に快楽を求めるのが好きなただの淫乱な雌犬だからな…。純粹にお前をお慕いしている者は、この事を知ったらさぞや落胆する事だろうな…違うか？ ハマーン？」

「はい…私は最低の女です」

最低の女：そう、私は最低の女だ。

私は『ザビ家』の復興を声高らかに叫んで民衆を率いているが、本当の所、私を初めて『女』にくれた御主人様：シャア・アズナブルと共に新しい時代を築きたかったのだ。いや、シャアが側に居てさえすれば、今思うと『ザビ家の復興』など二の次でも良かったのかもしれない。それ位、私の中に占めるシャアの割合というものは大きいのだ。

あの時、裏の顔ではお互い満ち足りていた筈なのに、表の顔ではお互いが、お互いの背負ってきている業の為に意地を張り、それがやがて決定的な対立にまで発展してしまった。

でも、その間でも 裏の私は常に『意地を張らないで、シャアに心を預けなさい。貴方の心を満たす事が出来るのは彼だけなのよ』と言ってくれた。ただ、表の顔の私は、その言葉に耳も貸せない位のプライドの高さと、背負うモノの大きさ、そして現実的な物の見方をしていたのだ。

シャアの主張は、分かり易く言えば現実を直視しない、いわゆる『理想論』なのだ。希望を失い、今日明日の生活に困る者達に『今を堪え忍び、人の革新によって人類が変わるのを待とう』と言ってみた所で、俗物である民衆が聞き入れてくれないのは、至極当然な事だ。人は霞を食べて生きている仙人では決してない。常に腹を減らし続ける生き物なのだ。

私達がアステロイドベルトに逃げ延び、辛く苦しい日々を過ごしている傍らで、地球圏からは限りある資源を浪費し尽くし、民衆を抑圧しながら日々の快樂に浸り続ける連邦の軍人や役人の情報が入る度に、人々の顔に徐々に怨嗟の念が色濃く反映されていく様を、シヤアは一体どんな気持ちで見ていたのでしょうか？

民衆を率いるためには、いきなりの崇高な理念など説いたところで無駄なのだ。その前に実現可能なハードルを設け、少しづつそこへ向けての道を引き、分かり易い目標を立てて、その先にある限られた椅子を取る方法でしか、残念ながら今の世の中では生きてゆけないのだ。

私が連邦側の家庭に生まれていたのならまた考え方も違っていた事であろうが、幸か不幸か私はジオン側の家庭に生まれてしまったのだ。それならば、その中で出来る事をやるしかない。それが私の考え方だ。

しかし：その考えをシヤアは決して判ろうとはしなかった。そして、表の顔での私の力が強まってくにつれて、裏の顔の私への調教は、より一層激しさを増していったのだ。

普通のセックスは当然ながら、鞭、緊縛、バイブ、吊し等がほぼ日常的に行われ、やがて体にピアス

を開けられ、通路での緊縛姿での露出や、浣腸されてアナル栓をされての会議出席など、端から見たらマニアックな責めと思われる事も、徐々にプレイの中に普通の様に盛り込まれていった。

表の顔と裏の顔：私とシャアはそれを上手く使い分けて心のバランスを取っていたからこそ、お互い狂わずに生きていられたのだろうと思う。実際、アステロイドベルトでは、鬱になり将来を悲観して自殺する者が非常に多かったのだ。

そうしていると、シャアが不意に四つん這いになっている私の視線までしやがみ込み、こう言うのだった。

「安心しろ。お前のイヤらしい姿は私だけのモノだ。決して誰にも渡さないよ。それに、この事をジオンとの交渉の駆け引きに使う気もない。あくまで私とお前のプライベートな事だ」

「それでいいの？ シャア…？」

「ああ…どのみち私は元ジオンの人間と言う事で、どこまでいってもエウーゴの幹部には信用される事は無いからな。頃合いを見たら…引くつもりだ」

その言葉に、私はついこう言い放ってしまった。

「それならお願い。私の側にいて！ 私と共にジオンの側で連邦と戦いましょう！ 今ならまだ何とでもなるわ。お願い…私の側にいて私を陰で精神的に支えてくれるだけでいいから…お願い…」

私の目から、自然と涙が流れた。シャアはそれを手でそつとすくうと、私をそつと抱きしめ、優しく唇を重ねたのだった。

「スマン…それだけは…出来ない」

「……」

私はそれ以上の事を言えなかった。シャアも彼なりの考えが有ってこそアクシズから飛び出したのだ。それは、彼の心の中にずっと存在する二人の女性…ララア・スンとセイラ・マス…。彼女達の事が彼の心から消えてしまわない限り、決して私とは心の奥底で交わる事が出来ないのだった。

永遠に絡まる事が出来無いであろう二つの糸…判ってる筈なのに…心がとても切なく、張り裂けそうになる。

「御免なさい。でも、私の心はいつでも貴方と共に有りたいと思ってる事だけは…忘れないでね…シャア」

「……判った」

シャアはそう言うと、再び私と唇を重ねた。今度はお互いの下を絡め合う程の深い、長いキスだった。

キスを終えた二人の間に、一本の唾液の橋が架かり、スーッと落ちていった。

「さて、プレイを再開しようか？ それとも止めようか？ どうする？」

「もちろん…お願いします。…御主人様」

そういう私は、これから愛しいシヤアに再び責めて頂けるという期待と不安が入り交じって、何とも言えない表情をしていたに違いないと思う。胸は高鳴り、握った拳には再び汗が滲んできていた。

「判った。で…やるからには容赦はしないぞ？ いいのか？」

「はい。覚悟は出来ております」

「ん…。ちなみに排便はいつ頃したのだ？」

「この時が来るのを期待して、一週間前からしております。ですから私の中にはイヤらしい固まりが大量に詰まっています」

「なかなか良い心がけだな。…覚悟しとけよ」

「はい。ありがとうございます」

「それと、私がここに居た時のプレイルームは…今、どうなってるのか？」

「それは…まだそのまま残しています」

「時々使う事があるのか？」

「はい：御主人様の事を思いながら時々：道具も前以上に充実してるかと…」

「相変わらずお前は淫乱でイヤらしい女だな。で、それとは別に、お前のこの部屋には道具らしいモノは何も隠してないのか？」

私はその言葉に、ベッドの下を指さして言った。

「その下の箱の中に、縄とバイブと首輪が入ってます」

シャアはそれを聞くと、ベッドの下からその箱を取り出し、蓋を開けて中身を確認すると、私の側に近寄ってきて中身を私に見せながら言い放った。

「ふうん…。このバイブ：昔使ってたモノよりも大きくなってるとんじやないのか？ 本当にハマーンは淫乱な女だなあ…」

シャアが私を蔑むような目で見ている。しかし、その言葉は私にとって『よくここまで大きなモノをくわえるまでになったな』というお褒めの言葉の裏返しでもあるのだ。

「はい。今ではその大きさでないと満足できないんです」

「三カ所責めのヤツは使わないのか？」

「それだと、付けたまま出歩けませんので、私は単体の方が好きなんです」

「バイブを装着したまま出歩くのか？ 外では大勢の人々がお前の為に必死に働いてると言うのに…。

ホント、ハマーンはイヤらしい女だな」

「はい。今ではあのスリルが一番感じるんです。それもこれも全て御主人様が調教して下さいのおかげです」

「で、今回もそのような事をやって貰いたいのか？」

「はい。是非……」

「判った。途中で泣き言を言っても無駄だからそのつもりでいるようにな」

そう言うと、シヤアは再び自分のソファに座り、残っていたウイスキーを口に含んだ。

「ハマーン、お前もソファに座って少し休んだらどうだ？」

優しい言葉をかけてくれるのは嬉しいのだが、御主人様として、もっと冷酷に家畜のように扱ってくられても構わないと私は思っている。その辺に、サドに成り切れないシヤアの優しさが現れているのだ。

シヤアは、サドとして相手を自分の下に屈服させたいという面を持っていると共に、マゾとして表の私のようなタイプに甘えたいという面も持っている男なのだ。

もつとも、マゾで御主人様に甘えるというのは如何なものかと思うが、幼い頃に母親と別れ、実の妹とも別れなければならなかった境遇故に、それは致し方ない事なのではないかと私は思っている。

事実、シヤアは私と一緒にいた頃、私を抱きながらも、その先に最愛の女性だったララアならばまだしも、母親やセイラを想像して抱いていた事も度々あった。…もちろんそれを本人に確かめた訳ではないが、体を重ねる事で伝わってくる『心』が、ニュータイプである私にはハッキリと伝わってしまうのだ。

私を抱きながら他の女…それも近親者との関係を想像する男…本当に最低な男なのだが、私にとってはそれがまた哀しく、そして愛しく思えてしまう。私達は引き合うべくして引き合った仲だということに…それを認めてしまう事が、シヤアにとっては耐えられない事なのであろう。

「いいの私は、このままで…。優位に立ってる時に、相手に情けをかける事は、指導者としては時として命取りに成る可能性があるわよ。望んでない事は、今の時代無理にするべきじゃないわ…」

そう言いながら、私はソファに座っているシヤアの下へ這って行き、太股の所に頭を擦り付けて、しばらく服従する快樂に浸っていた。

そして、下半身に目をやると、心なしか再び大きくなっているのが判った。私はシヤアのベルトを外し、ジッパ―を下げ、多少堅くなってるペニスを引きずり出した。

「食べたいのか？」

シャアが多少酔った顔で言い放った。

「はい。だって、これをずっと待ってたんですもの」

私はそう言うと、シャアの返事を聞かないまま、アイスをしゃぶるように一気にペニスをくわえてしまった。口にくわえる際に、若干のアンモニア臭と、恥垢の匂いが漂ったが、興奮している私にとっては全く問題ではなく、逆に私にとって『とんでもなくイヤらしい事をしている』という羞恥の心を加速させるに過ぎなかった。

我慢できない…。私はシャアのペニスをしゃぶると共に、左手で自分の下半身をまさぐった。すると、火照る体が少しだけ癒されていった。

「んっ…んっ…」

∨ シャアのペニスを、私は時には彼に調教された時のテクニックを使い、またある時はシャアが去ってから、絶対忠誠を誓う雄奴隷共を使って身に付けたテクニックを駆使し、それに愛情という隠し味を盛り込んで嬉しそうにしゃぶり続けた。

どの位経った頃だろうか、シャアがソファから立ち上がり、私の目の前で自らのペニスをそつとごき始めた。

「そろそろ出そうだ。いいか？」

「はい。でも、最後まで私の口で奉仕させてください」

私は再びシャアのペニスにしゃぶり付くと、愛情を込めて奉仕させて頂いた。やがて、シャアの『うつ！ 出る！』と言ったかと思うと、一瞬ペニスが大きく膨れ上がり、その先から人肌と同じ体温のミルクが勢い良く私の口の中に吹き出してきた。

『シャアのミルクが私の口に：いいっ！ イキそうっ！！』

口の中に注ぎ込まれるシャアのミルクを飲み込みながら、私は左手で左乳首のピアスを引っ張り、右手でクリトリスと大切な部分を今まで以上にまさぐった。どんどん、どんどん快感がこみ上げてくる。そして遂に：ペニスをくわえている為に声にならない声を上げた私は、三本の指を大切な所に深々と差し込み、体を振るわせながら昇天してしまった。

『イツちゃった。シャアのミルク飲みながら私：イツちゃった』

快樂の余韻に浸りながらも、私はシャアの尿道からミルクを吸い出し、きれいに舐め回して後始末をした後、彼の下着とズボンを元に戻した。

「どうだったかな？ ハマーン？」

「はい、とっても嬉しい褒美でした。本当に：ありがとうございます」

シヤアの前で深々と頭を下げる私：。他の誰でもないシヤアだからこそ出来る事なのだ。

「で：どうする？ まだ続けるのか？ 満足したのなら止めてもいいんだぞ？」

シヤアが私の頭を優しく撫でながら言った。

「もちろんです。淫乱な私の体は、あの程度の事では疼きが収まりませんもの：」

懇願する表情でシヤアを見つめた。シヤアは『やれやれ』という表情を一瞬見せたが、すぐにニコツと微笑み、私の額に優しくキスをしたかと思うと、ウイスキーが置いてあるテーブルに向かって歩きながらこう言い放った。

「本当にお前は淫乱でいやらしい女：いや、雌犬だな。それなら私がウイスキーを飲んでる間に、自分で首輪をはめて縄掛けして、パイプを下の口にぶち込むんだな。そこまで自分で出来たら：考えてやろう。なあに、私が居ない間もやってた位だから、あの頃より上手になってるんだろう？ 私はそれを肴にちよつと楽しませてもらうよ」

シヤアはそう言いながら、再びソファに腰掛けた。そして、胸の内ポケットからサングラスを取り出して掛け、私に対して目線が見えないようにするのだった。

シヤアの目の前で自縛してバイブをぶち込む：確かに彼が言う通り、この部屋で私は何度も自分で自分を縛り、首輪をはめ、下半身の大切な所：時には後ろの穴にもバイブを入れて、等身大の鏡の前で惨めな自分の体を映し出しては、快楽に浸り、そして絶頂を迎えていたのだった。

確かに、他人には見せられない位、イヤらしく恥ずかしい光景ではあるが、シヤアが居ない悲しさを紛らわす為、そして日々鬱積するストレスを発散する為、そしてもちろん私自身がそのような快樂無しには生きていけない体になってしまっているのである。もう、止めることは考えられなかった。

シヤアを思っただけオナニーするのはいつもの事であるし、シヤアに入れられる事を思っただけそのバイブを出し入れる事も別に恥ずかしいことでは無いのだ。でも、今日は目の前にシヤアが本人が居て、サングラスの奥底から私をじっと見ているのだ。

愛しい人に私の痴態を見られている：そんな事を考えると、私の中でイヤらしい血がドロリと体中を駆けめぐっていくような錯覚を覚えるのだった。ホントに、私はどこまで淫乱なのだろう。淫乱、変態、イヤらしい女、雌犬、奴隷：そんな言葉が頭の中をグルグルと回っていた。

「どうした？ 立っただけでは面白くないぞ」

シヤアが、口元をにや付かせながら言い放った。たぶん、サングラスの奥底では、私を軽蔑するよう

なめで見てゐる事であろう。屈辱？ …いえ、それすらも今の私には快樂への一要因にしか過ぎなかった。

「はい。直ちに支度しますので、もう少しだけくつろいで下さい」

私は、目の前の縄、首輪、バイブを目の前にして、どれから身に付けようかと考え込んだ。全身を縛ってからバイブを股間に無理矢理こじ開けて入れるのも、それはそれで気持ち良いのであるが、今回は先にバイブを股間に入れてから、体を縛る事にした。

立ったままの私は、ラビアを左手で広げ気味にして、右手に持ったバイブを股間に押し当て、押し上げるようにして大切な所へ挿入した。

すると、バイブは一回絶頂に達した為に、意外な程スルリと中に埋没していった。

「これ…」

私はシャアにそう言うと、バイブのリモコン部分を放り投げた。彼も手慣れたモノで、受け取ったものを瞬時に理解し、私が全身に縄掛けしている間に、スイッチを入れたり切ったりして楽しんでいた。

彼に手渡したリモコンバイブのスイッチが忘れられた頃に何度も入れられた。ある時は小刻みに体を振るわせる程度の刺激だったり、またある時は大きく弓なりに成る程の刺激だったり…その間に、私は恥ずかしながら軽くイッてしまった。

すると、シヤアがニヤニヤしながら言い放った。

「なんだ…。私の命令も無しにもうイッてしまったのか？ 本当にお前はイヤらしい雌犬だなあ…。これでは前以上にもっと厳しく調教しなければならぬかもな…」

調教：一体私はこれからどう調教されてしまうのだろうか？ 鞭で体を打たれるのだろうか？ それとも全身にロウで化粧を施されるのだろうか？ それとも後ろの穴に『戒めの液体』を入れて耐えなければならぬのだろうか？ それとも…。

様々な想像が、私の頭の中を駆けめぐった。その間も、私の体は、私自身によって縄掛けされていた。雑誌とかを参考にして胸が下からせり上げられるような形を基本として、自分なりに色々試してみた結果の縛り方である。

そして、緊縛が完了し、奴隷の証である首輪を装着して、シヤアの前に歩み寄った。

「御主人様、準備が整いました」

「んっ、多少時間が掛かったが、まあいいだろう。それでは…」

シヤアは、立ち上がると、私の首輪に付いている手綱を引っ張り、私を大鏡がある前に連れて行った。そして、全身縄掛けされた私の姿を鏡に映すところ言い放った。

「よく見るハマーン。これが今のお前の姿だ。お前が自ら望んで自分の体を縛ったんだ。ホントお前は淫乱でイヤらしい雌犬だよなあ…」

そう言われながらも、鏡に映る私は全身に縄を纏った姿でうつとりとした表情をしていた。そうだ、これが本当の私なのだ。表の顔は、この目の前の鏡に映る私を隠すための仮面なのだ。私は人を屈服させる事が好きではあるが、その反面愛している人にはこの様に屈辱的な姿で屈服させられる事を望んでいるイヤらしいマゾ女なのだ。

鏡に映る緊縛された自分の姿を見ているだけで、私は体が熱く火照り、快感が増していき、シヤアの支え無しでは立っていられない程の状態になってしまった。

「感じてるのか？ ハマーン？」

「はい。とても気持ちいいです」

私は、無意識にシヤアに抱きつき、彼の首筋に下を這わせていた。このままでは自分が自分で無くなりそうな気持ち：もう自分で自分の行動が制御出来なくなっていた。そして次から次へと押し寄せてくる快樂の波に、私は完全に酔っていたのだ。すると…。

「じゃあ、そろそろ行くか…」

と言って、再び私の首輪に付いている手綱を引っ張り、出入り口の方へと歩みだした。

「あの…？ 何処へ？」

私は恐る恐る訪ねた。

「何処へだと？ 決まってるじゃないか。プレイルームだよ。そのままの姿でな」

シヤアは平然と言い放った。その瞬間私の顔から、スーッと血の気が引いていった。

「そんなんっ！ こんな姿ですか？！」

「そうだ。嫌なのか？」

「嫌も何も…こんな姿で通路に出て、もし誰かに見付かったら私は…！！ 私は破滅です！！」

「大丈夫だ、プレイルームまでは大した距離では無い事だし、第一そこまでは監視カメラも無い上に、今日は見張り番をも人払いさせてるんだろう？ 一体誰に見付かると言うのだ？ ハマーン？」

確かにこの部屋からプレイルームまでは距離にして20メートル程度の距離であり、監視カメラに關しても私が意図的に設置を拒んだ為に最初から無く、見張り番に關しても最初からシヤアとのこのような關係を前提に招待していたので、あえて付けなかったのだ。

しかし、世の中何があるか判らないし、第一プレイルームの数メートル先には、人通りが多い通路が

存在するのだ。もし、このような姿を、大勢の兵士に見られたら…。

「本当は誰かにこの姿を見られたいんだろう？ ハマーン？」

「違います！」

「嘘だな。その証拠に乳首がツンと立ってるぞ。お前は本当はこの姿を他の人に見て貰いたい淫乱な雌犬なんだよ」

「違います！」

「いいや、違うないな」

シヤアは私の堅くなった乳首を指で触り、右の首筋にキスをした後に、耳たぶを軽く噛んだ。そして、リモコンバイブのスイッチを入れた後に、私の耳元でこう呟くのだった。

「自分に素直になれ、ハマーン。仮に誰かに見られたとして、そいつを口封じに仲間にしてしまえば良だけの話だ。違うか？」

「そんな…」

心臓がドキドキしている。縄酔いでボーっとしている私への容赦無いシヤアの責め…色々な要因が合わさり、快樂の波が一層高くなっていく。いけない。このままでは、また絶頂に達してしまう。

「イツ！ イクツッ！！」

そう言い、これから絶頂に達しようとした時、にシヤアは全ての愛撫を止めてしまったのだ。私は足下の階段を急に取り外されてしまったような、イキたいのにイケないというもどかしい気持ちで一杯になり、思わずシヤアにこんな言葉を言い放っていた。

「お願い！ 止めないでイカせて！ イカせてっ！ 体が疼いてたまらないの！ お願い…」
私はそう言っで自分で乳首やクリトリスを愛撫しようとしたが、シヤアによって強引に止められてしまった。

「何で！ どうして止めるのっ！ もう少しなの、もう少しなのっ！ 触らせて！！」

「ダメだ。お前は『命令に服従する』という私との約束を破ってるのだからな。もしイカせて欲しければ、この姿のままプレイルームまで歩いて行くんだ。いいな？！」

「あっ…うっ…」

「どうなんだ？ ハマーン？」

そう言いながら、軽く指先で私の乳首を転がすシヤア。再び快楽が蘇り、絶頂を得るためにはもうどうでも良いという気持ちになってきた。

「はっ…」

「ん？ 何だ？」

「はい。行き…ます」

シヤアはその言葉を聞いて、嬉しそうに言い放った。

「行くんだな？ よし、いい子だ。それでは、もう一度私にお願いする形で言ってみるんだな」

あくまでも私がシヤアに懇願して…という形を取るらしい。もつとも、私自身それを言う事自体に気持ちよくなってしまうのであるが…。

「私…ハマーンは全身を縄掛けして首輪をはめて、下半身にはバイブをぶち込んだイヤらしい姿で、絶頂を迎えたいが為にプレイルームまでの通路をこのままの姿で歩いて行きます。御主人様、どうかこの淫乱でイヤらしくてマゾの雌犬をプレイルームまで導いて下さいませ…：あんっ…！」

自分で言った言葉で気持ち良くなってしまった。もう、今の私には理性などかけすらも残っていないらしい。私は…今人間として最低の所まで堕ちているのではないのだろうか？

「よし、よく言えたな。それではプレイルームまでお前を散歩に連れていくとしよう。その前に、どうして犬が二本足で立ってるんだ？ 犬は四本足で歩くんだろう？ 違うのか？」

「はっ、はいっ！」

私は慌てて四つん這いになった。私は最初、小走りで通り抜ければ大丈夫だと思っていたのであるが、これではその何倍も時間がかかってしまう。身に付けるコートも持たない上に隠れる場所もない…も

し部屋に行き着く前に誰かに出会ったら…その瞬間、私の全てが破滅になってしまうのだ。

確かに見られたら…という気持ちはある。でも、出来る事なら、いや、絶対に見られてはならないのだ。破滅の度合いが大きい故の大きな快楽…それを止められないもう一人の私がいる。縄掛けされた姿で露出する事が好きなもう一人の私が…。

「さあ、そろそろ散歩に出かけるぞ、ハマーン」

「はっ、はいっ！」

シヤアに手綱を引かれ、ドアの前に四つん這いのまま待つ私。私は一体これからどうなってしまうのだろうか？

期待と不安が入り交じり、胸が過度の興奮のためドクドク行ってるのが判る。そうしている間に、シヤアはドアのロックを解放した。その瞬間『プシュー』という音と共に扉が開いた。

もう後戻りは出来ない。私は覚悟を決めて、シヤアに引かれるまま、犬のように四つん這いで通路へと歩み出した。

完